海上交易拠点オルムズにおける ポルトガル要塞の教会と兵站所 そして防御についての考察

A STUDY ABOUT A CHURCH, BARRACKS, AND DEFENSE SYSTEMS IN THE PORTUGUESE FORTRESS AT HORMOZ ISLAND

今川朱美 — * 1

Akemi IMAGAWA — * 1

キーワード:

オルムズ (ホルムズ), ポルトガル植民都市, 要塞都市, 要塞, 港町

Keywords:

Ormuz (Hormoz), Portuguese colonial city, Fort city, Fortress, Port town

Ormuz was a strategic point on the trade routes between the Persian Gulf and the Indian Ocean. There remains a Portuguese fortress in Ormuz Island, which Portuguese used as their stronghold between 1515 and 1622, when they advanced to Asia. Although this fortress played a historically important role, the availability of related literature is quite limited. In this article, based upon a consideration through survey results and collected documents, the author reports that the facilities which were conventionally regarded as a church and barracks must have been a cistern and caravan sarays, and that the defense systems pointed toward the direction opposite to the usual one.

1. 研究の目的と方法

Hormuz (ホルムズ/オルムズ) ^{註1)}は、ペルシャ湾とオマーン湾の海峡にある 40 k m²ほどの小さな島である。紀元前より海上交易拠点であったホルムズは、Minab (ミナブ) 川河口付近から、1301 年に Jerum 島に移り ^{註2)}、港町を含む島全域が Ormuz (オルムズ) と呼ばれるようになる ^{註3)} (図 1)。

図 1 オルムズの遷都と湾港機能の移設

そのオルムズ島の北端に残るポルトガル要塞 (Ghal'ê-ya Portoghāliha=ポルトガル城砦) は、ムスリムのシルクロードによる交易ネットワークから、海上交易ネットワークへと変換を招いた重要な拠点 ^{註4)}であり、植民地政策の中でアジアを制する拠点でもあったが、遺跡は残るものの詳細は明らかではない。

ポルトガル要塞についての既往の研究はなく、オルムズ王国またはオルムズ市に関する記録に多少の記述があるのみである。イランのホルムズガン州文化遺産保存協会 (Hormozgan Cultural Heritage Organization) や資料館にも、要塞の変遷を示す資料のみならず、現

在の遺跡の正確な記録もない。そのため、ポルトガル統治時代に、要塞がどのように機能していたかも明らかではない。

そこで、植民都市研究の一環 ^{註5)}として、旧大英帝国植民地化以前の、植民都市の起源と原型、その変容と転成を現地調査し、形態解析を行うことを目的として 1999 年に現地調査を行った。

16 世紀ごろのポルトガルの城砦は扁平の四角で、隅塔があるのが特徴であるが、オルムズの要塞も同様の造りをしていた。非常に暑く真水のない島ではシスターン (雨水貯留槽) が、水の供給と保冷の施設として存在した。中庭には、①文化遺産保存協会が教会と公言している 230 m²ほどの地下空間があり、②残存する城壁には兵站所が中庭に向かって並んでいた。①について、教会とされた空間内の列柱に水の貯留による浸食跡があることから、シスターンではなかったか、②については、兵站所というよりはキャラバンサライ (隊商宿) ではなかったか、という疑問を抱いた。また、城壁外部の海岸線に海に向かって大砲が配されていたが、要塞の形状から防御方向にも疑問を持った。その疑問に対し、現地調査の際の簡易な測量データと、ポルトガル植民時代の既往文献や資料などの記述を通して、オルムズ島におけるポルトガル要塞の、①教会説②兵站所説③要塞の防御方向について考察を行い、解明を目指すものである。

2. ポルトガル要塞の歴史的背景と残存資料

ポルトガルは、海上交易ネットワークの拠点となりえるオルムズ王国に要塞 (商館) の建設を望んだ。1515 年にポルトガル総督アルブケルケによってオルムズ王の宮殿は完全に占領され、国王は幽閉された。その後の 1 世紀程がポルトガル要塞の最盛期である。1622 年サファヴィ朝のシャー・アッバースが大英帝国の東インド会社の力を借りポルトガル退去に追い込み、要塞は中近東進出拠点としての英国商館に活用されていたが、1688 年以降放棄されてしまった。

ポルトガル要塞に関する資料は非常に少なく、記載されている最

^{*1} 広島工業大学工学部都市建設工学科 助教・博士 (工学)
(〒731-5143 広島市佐伯区三宅 2-1-1)

^{*1} Assistant Prof., Faculty Engineering, Dept. of Civil Engineering, Hiroshima Institute of Technology, Dr. Eng.

古のものは、トメ・ピレス^{註6)}の『紅海からシナ国までの東洋の記述^{文献1)}』である。オルムズ市の記載がある第1部は、著者がインド滞在中(1511~1512年)の見聞に基づき書かれたとされており、挿絵が添えられている(図2)。その後、リンスホーテン^{註7)}が『東方案内記^{文献2)}』にポルトガルの勢力拡大を記している中に、オルムズの記載もある。

図2 オルムズ
(Correa, p69 文献1)

図3 ormvs 1573
(F. Hogenberg, p213 文献5)

地理図集としては世界で2冊目の1572年に発行された『Civitates orbis terrarum^{文献6)}』にも彩色が施されたオルムズの姿が見られる。大英図書館に所蔵されている1573年発行の『The Atrun Hispaniæ Urbes^{文献5)}』には着色されていない同じ図(図3)が収められており、先の文献6を再編したものと思われる。これら以外のオルムズ島の要塞が見られるものは17世紀のイギリス領となった時期に、航海図または地図としての資料がある。

3. 教会説についての考察

オルムズ島は塩岩でできた不毛の島であり、真水もない。そのため大陸から水の供給を必要としていた。ポルトガル要塞では約1年半分の水が貯留できるようにシスターン(雨水貯留槽)が設けられていた(図4・6:A1)^{註8)}。水が貴重であったゆえに、内陸側の南門(D)から遠い位置に計画されている。また、シスターンの東には総督の居住塔(C)がある。(C)の天井や床は抜け落ちているが、壁に残る装飾から身分の高い者の居住空間だとわかる。この商館において最高位のポルトガル総督の居住塔であったと考えるのが妥当である。この総督の居住塔と総督のオフィス(J)^{註9)}がいずれもシスターンに近かったことから、要塞での水の管理の重要性がわかる。シスターンの平面は楕円形で、キャットウォークを含めて長直径が約17m、短直径が約13mであった。シスターン底面から天井まで約9m。底面からキャットウォーク床面まで4~5mである。

A1とは別に、教会とされているA2(図5・6)も、建設されたときからシスターンであったとの見解を述べたい。ここで議論したいのは、教会として建設されたのではなく、もともとシスターンとして計画されたということである。

図4 円形のシスターン(A1)
(2009年撮影:山根氏)

図5 教会とされるシスターン(A2)
(1999年撮影)

まず、現地の文化遺産保存協会によるとポルトガルのキリスト教

会が、要塞中庭に細粒砂^{註10)}が堆積したことによって、教会部分が地下空間となり、後世シスターンとして利用したとしている。シスターンであったことは、柱や壁に、床面より1.5m(GL-20cm)あたりに水による浸食跡が残っている(図5)ことから間違いはない。

図6 ポルトガル城砦(要塞)実測図

最初からシスターンであったというのは、①内部には地表面の高さで、キャットウォークが設けられているが、あとから作られたものではない。なお、キャットウォークは教会に不要である。②キシム島に残るポルトガルの出城にも中庭にシスターンと、シスターンに向けての水路が現地調査にて確認できたこと、それを裏付ける資料として図7を示す。この図の中庭にあるTは凡例でタンクと記されている。キシム島の要塞同様、1515年から建設されたこの要塞も中庭にシスターンが計画されたとするのは極めて自然である。

図7 キシム島の城砦(1684-88) 文献10)

さらに、中庭に砂が体積し時間の経過と共に教会が地下空間になった、ということについてであるが、③漆喰を作るための堅穴(図

6・8 : B1・B2) は当初のまま残っており、中庭地表面の上昇は認めにくい。そして、A2 が教会ではなかったと報告する根拠として④ポルトガル人墓地は要塞外部にあり墓地には教会も併設されていた。このことから、要塞内部に独立した教会建築が必要であったとは考えにくい^{註11)}。さらにE3は二重壁になっており改築したと見られるが、内側に増設した壁にはニッチが認められる。後述するが、敵から逃れる部屋でもあったと考えられることから、ポルトガル占拠後に礼拝空間があったとすれば、E3であったと考える。⑤A2は、教会に必要なアプスやニッチ、十字模様なども認められず、教会としては機能していない。上記5つの理由により、建設当初よりシスターンであったと考えられる。A2は、柱の高さは床面より160cm程しかないが、ヴォールト^{註12)}と長堂式の厳格な空間を持つために教会と称されたのではないかと考えられる。

また、『彼らの飲む水には少量のアルメセガが混入され、冷やされている』との記述^{註13)}からも、A2に貯留された水は飲み物を冷やすためにも利用されていたと考える。なお、A1はキャットウォークより水面へのアプローチが難しく、水量が減れば水面が下降するので何かを冷やすために利用したとは考えにくい。

4. 兵站所説についての考察

要塞の北側短辺の壁の3室(G1)、東側長辺の壁の13室(H1・H2)は、文化遺産保存協会によると、兵站所とされている(図6・8参照)。北側短辺に残る4つの空間のうち一番東の空間(G2)は北側海岸につながるエントランスである。その東には、守衛室(I1)と捕虜を幽閉する部屋と思しき空間(I2)がある。ポルトガルの総督はオルムズ王を要塞に住まわせ監視していた^{註14)}ことから、王を軟禁する空間であった可能性もあると考える。北側に残る3つの部屋(G1)は、海岸側の出入口に近いこともあり、兵站所であったというのは納得ができる。3室の西側は崩れてしまっているが、並びに同サイズの部屋があったとすれば計5室の兵站所があったのではないかと考えられる。

図8 中庭を南側建物上部より撮影

しかし、東側は13の部屋のうち、正面の壁が残存し^{註15)}、形状が確認できた南から7室(H2)は倉庫であったのではないかと考えられる。それぞれの部屋は中庭に向かって2つの入口と上部に縦長の開口がある(図9)。この要塞は商館として機能^{註16)}しており、駱駝、驢馬、馬(種馬)だけでなく、薬種・薬草類、香辛料、干果、葡萄酒、真珠、銀貨などが運び込まれ取引をされていたことから、それらの商品と商人が共に滞在する部屋が必要である。文献1によると、総司令官と数百名の兵士に護衛されながら隊商が4月と9月に訪れ、大規模な取引が行われていた。すなわち倉庫機能だけでなく、キャラバンサライとしての機能がH2にあったのではないかと考えられる。

図9 中庭からキャラバン正面壁(1999年撮影)

①H2は、内部空間に入ると、地表面(床面)より2.4mの高さで、壁面に大梁があったと考えられる穴があり、2階床があったと確認できた。とすれば、上部開口は2階床に対しテラス窓であったことがわかる。正面壁には、2階床下かつ1階天井付近に2箇所の通気口があることから、居住性を高める工夫があることが確認できた。②2つある入口の幅は120~130cmであり、人が駱駝を引いて通る場合の必要幅が120cm程であることから、馬や駱駝の出入りを考えたものであったことがわかる。なお、シスターン入口は80cm(A2)、100cm(A1)であったことから、用途によって出入口の幅を作り分けていたのである。①②より、キャラバンサライ同様、駱駝や馬などは1階に、運び込まれた積荷は上階に運ばれ、商人または管理人も2階に寝泊りしたことがわかる。③キャラバンサライとした部屋(H2)はD=6~6.5m、W=4.5~5m程である(H1は崩壊のため測量不可能であった)。兵站所(G1)の奥行きは同じく6~6.5mであったが、幅は5.5m程である。部屋の有効幅が5.5mというのは、兵站所だとすれば軍馬を向かい合わせに2列配すると壁側から2m必要であり、中央に1.5m程の通路が取れるので、軍馬舎に程よい幅である。したがって中庭側に壁があったとするならば、部屋中央に1箇所、人が乗ったままでも通過できる高さ3.2m^{註17)}程の出入口があったのではないかと考えられる。2009年3月現在、山根氏の調査記録によると、北側の3部屋にH2と同じ壁が復元されているが、これは検証された復元ではない。

5. 要塞についての考察

多くの要塞は隅塔に大砲を備え海からの侵入者を攻撃^{註18)}した。オルムズ要塞は破損が激しく形状が残っていないが、北側に隅塔があったのではないかと考えられる。図2を見ると、隅塔の描写がある。だとしても、当時は要塞の周囲が砂浜であったため、要塞からの砲弾は海上の船に届かない。また、非常時に海岸線に大砲を設置して応戦したためか、文化遺産保存協会はオフィス(J)と守衛室(I1)前の海岸に大砲を設置しているが、この場所では防衛の効果がない。

ポルトガルが要塞を建設した当時は、大砲が島の内陸側を向いて設置されていた(図6)と考える。銃眼も内陸側の壁面に残っており、内陸からの侵入者に対し小銃隊を備える構造となっている。オルムズ王国の反乱^{註19)}にも備えていたと考える。ポルトガル総督がオルムズ王を支配下に治め反乱の心配がなくなったが、その後、イギリス東インド会社がカルカッタに商館を設置した(1612年)ため、イギリス艦隊の攻撃を意識し始めたことは考えられる。

海からの侵入に対しては、騎馬によって応戦するしかない。兵が

応戦している間に、総督らが逃亡するための手立てが計画されていた。逃亡方向としては、E1→E3 を通り内陸側に順路が計画されている。その根拠は、E1 に設置されていた扉のヒンジ穴（図 10）から、扉が中庭側に開くようになっていていることにある。これは、E3 から中庭に出るのは安易であるが、逃亡する際は扉を閉めれば海側から押し寄せてきた敵陣が進入するのに時間を要する。したがって、いずれ来るであろう海からの侵入者に備え逃亡が可能なプランとなっている。なお、E3 は、礼拝堂として改築された形跡があるが、改築の時期については不明である。

図 10 中庭に面した扉の構造(1999 年撮影)

6. まとめ

- 1) 教会は、もともとシスターンとして建設された。また、保冷库としての機能を果たしていたことを指摘した。
- 2) 城壁に並ぶ兵站所のうち、東側の正面壁が残り内部空間の確認ができたものについてはキャラバンサライと同じく 1 階が家畜、2 階が取引商品庫と商人または管理人の滞在空間であったと考える。
- 3) 要塞は、建設当初は内陸からの反乱に備え、後に世界情勢をにらみ、海からの侵入者から逃れる構造となっている。

< 謝辞 >

平成 11-13 年度科学研究費国際学術研究「植民都市空間の起源・変容・転成・保全に関する調査研究」（研究代表者：布野修司）で、1999 年 10 月に現地調査を実施し、2000 年 1 月に大英図書館及びロンドン大学 SOAS にて資料収集を行った。このようなチャンスを与えてくださった布野修司先生（滋賀県立大学教授）と、調査指導および現地にて考察を与えてくださった地地利明先生（京都大学名誉教授）に深く感謝いたします。また、1999 年 7 月に渡辺菊真氏が予備調査を行い、2009 年 3 月に山根周氏（滋賀県立大学准教授）が追跡調査を行った。これらの情報も快く提供いただいたことに感謝します。

< 註 >

- 註 1) オルムズ：ポルトガル要塞の最盛期には、Hormoz ではなく、Ormuz（または Ormus）と記載されている（文献 1）ため、本論ではオルムズと言う。
- 註 2) 紀元前より本土の Minab 川河口付近に Harmozia という名で存在し、12 世紀にアラビア半島南部より移住してきたアラブ人によってインド洋貿易の拠点となった。しかし蒙古族の侵略を受け、それを避けようと Jerum 島に遷都した。文献 1), 2), 3), 12)
- 註 3) オルムズ王国（10～17C）は、オルムズ島をもって王国であった。王はポルトガル占領後しばらくは宮殿（要塞）に捕らわれていたが（文献 1）その後はポルトガル人街の郊外に住居を構えた（文献 2）。ペルシャが英国と共にポルトガルを追放した後、オルムズ王国として統治されることはなかった。
- 註 4) オルムズ、ゴア、マラッカ、アデンが、ムスリム交易ルートにおける四大都市とされていた（文献 1）。
- 註 5) 平成 9-10 年度 科学研究費国際学術研究「植民都市の形成と土着化に関する比較研究」で、旧大英帝国の植民都市の基本特性を明らかにした。それを下地に平成 11-13 年度科学研究費国際学術研究「植民都市空間の起源・変容・転成・保全に関する調査研究」（いずれも研究代表者：布野修司）は、イギリスが奪取する以前の植民都市の様相と文化変容の問題を、現地調査を通じて解明し比較研究することにより、その過程や都市構造の理解を深め、都市計画策定のための知見と指針を得ようとするものであった。
- 註 6) トメ・ピレス（Tomé Pires: 1466-1524）＝王子付きの薬剤師であったが、

フェイトール（インド在任の商館員）としてカナール（インド）に到着。ヴァスコ・ダ・ガマに始まったポルトガルのアジア進出が、インド総督アフォンソ・デ・アルブケルケの功勞によりインド洋沿岸を手中に収めた時期であった。トメ・ピレスの『東方諸国記』は、「当時のポルトガル人が知っていた東洋について組織的に記述しようとしたもので、いわゆる『地理書』範疇に入るものである（生田）」とされている。

註 7) ヤン・ホイフェン・ヴァン・リンスホーテン（Jan Huygen van Linschoten: 1563-1611）1579 年頃にポルトガルのリスボンから聖職者に仕えるためインドのゴアへ渡った。ゴアではアジア各地の地理・歴史・民族等の情報を収集し、アジアにおけるポルトガルの勢力拡張を記した書をまとめた（文献 2）。この書は、オランダの同地域進出の貴重な資料となった。

註 8) 文献 2, P125, L9～10

註 9) 総督のオフィスとされる J は、ドーム状の天井を持ち、両開きの扉と海を眺める窓が配されている。商談をする空間として適切であるため、文化遺産保存協会のオフィスという説明に納得をしている。

註 10) 細粒砂：粒径が 1/4～1/8mm (250～125μm) のとても細かい砂のこと。

註 11) ヨーロッパ中世の城には城壁内に独立した教会（カペレ＝礼拝堂）があるが、その場合は墓地も城壁内にあることが多い。

註 12) 交差リヴ・ウォールトの建築は、12 世紀初頭には英国で建設されており、その後ゴシック、ロマネスク建築へと引き継がれた。

註 13) 文献 1, P555, 上段 L13-15 による。

註 14) 文献 1・2 によると、オルムズ王はペルシア・アラビア各地と島々に総督を配置し税金を徴収していた。が、ポルトガルに占拠されてからは、王の名で平和裡に命令を下し王国を支配するために、王は要塞内に住まわせられた。もし王が、統治のことや財産のことを尋ねたり、自由になりたいと思ったら、目を潰され市内の家に幽閉され、王家の血統より若い少年が新たな王となり、要塞に住むことになった。

註 15) 1999 年には、上部のテラス窓の形状が確認できたが、2009 年の時点では崩壊が進み窓上部の形が残っている箇所はなくなってしまった。現在、当局による修復が進んでいるが、検証のなされぬまま北側と東側最北の部屋に正面の壁を積み上げている。（2009 年の状況は山根氏の調査記録による）

註 16) 文献 1・2 には、ポルトガル総督は、カピタン（商館長）と記述されている。また、要塞（城砦）において、多くの商品が取引されていた。

註 17) 文献 11 によると、駱駝の大きさは、W0.8m、H2.25m とし、荷物の積み下ろしと駱駝や馬が一時的につなぐことが可能な空間の寸法として通常 1～1.5m が定められている。

註 18) ポルトガル要塞の事例が少ないため、オランダフォートの建設について詳しい文献 13 を参考とする。

註 19) ポルトガルの攻撃を受けたオルムズ国王は要塞の建設を許した(1508 年)が、その後、国王はポルトガルに反旗をひるがえしている。（文献 1 他）また、図 11 には要塞南側住宅地との間に運河を建設し、広場も設けている。これは①防衛目的②商品の荷揚げ施設として整備したものと見られる。運河を記載した地図は図 11 を含む 2 葉のみである。

図 11 Hughley による ormvms, Subrvey on the country(1635) @ The British Library, Manuscripts

< 参考文献（本稿に寄与した記述が多く重要であった文献の順） >

- 1) トメ・ピレス著、生田滋他訳：『東方諸国記（1515）』大航海時代叢書 5, pp. 69-73, 岩波書店, 1966.
- 2) リンスホーテン著、岩生成一・沢沢元則訳：『東方案内記(1596)』大航海時代叢書 8, pp. 116-129, 岩波書店, 1968.
- 3) Günther Schweizer: BandarAbbās und Hormoz Schicksal und Zukunft einer iranischen Hafenstadt am Persischen Golf, pp.7-18, 1972
- 4) マルコ・ポーロ著、青木一夫訳：『東方見聞録(1553)』校倉書房, 1960
- 5) Ad Orientem & Auftrum 『The Atrun Hispaniæ Urbes』 Civitatescelebriores, p213, 1573, (The British Library, Sloane)
- 6) Braun und Hogenberg 『Civitates orbis terrarum』 I-54, 1572, Cologne (the Hebrew University of Jerusalem and the Jewish National and University Library)
- 7) João Campos: The Intercontinental Urban Experience of Portugal since the Beginning of Modern times, Rua de Santa Luzia, 1997
- 8) 家島彦一『海が創る文明』朝日新聞社, 1993
- 9) Unknown 『Kempthorne's Sea Views etc.』 Civitatescelebriores, p51・53・56, 1688, (The British Library, Sloane)
- 10) Engelbert Kaempfer 『A plan of the Castle of Kismis in the Persian Gulph』 1684-88(The British Library, Manuscripts)
- 11) ベシーム・S・ハキーム『イスラーム都市 アラブのまちづくりの原理』第三書館, 1990
- 12) 宮崎正勝『鄭和の南海大遠征』中公新書, 1997
- 13) 布野修司『近代世界システムと植民都市』京都大学学術出版会, 2005

[2009 年 6 月 19 日原稿受 2009 年 11 月 9 日採用決定]